

守護聖者と圖像の展開

植田重雄

〔論文要旨〕 本稿においては、ヨーロッパの守護聖者の中でとくに庶民に親しまれてきた聖クリストフォルスが宗教の歴史の中でどのような変化を遂げてきたか、主として「伝説」(Legend)と呼ばれる面に焦点をあてて考察する。とくにパレスチナからアルプスを越えてヨーロッパにはいったとき、ゲルマン的要素を包摂しながら新しい聖者像を形成していった過程をたどってみる。父と子と聖霊の三位一体の中の聖霊の具現者は聖者であり、中世のキリスト教の性格を示すものである。

聖者崇拜は芸術家の表現に委ねられて庶民に親しまれ、新しい伝説を生み出し、聖者像の展開の問題をここで取り上げ、圖像の特質を検討する。

〔キーワード〕 守護聖者、伝承、宗教の総合性、異質文化の変容、圖像と崇拜短かい祈りの形式、凝視、瞑想

はじめに

神・キリスト・聖霊(父と子と聖霊)の三位一体の教義を形成したキリスト教はとくに、「父と子」(神・キリスト)の論議に集中する傾向があり、ここだけに重点を置いて他を省みない教派もある位である。たしかに聖霊論は難解で茫然としており、把握しがたい性格を持っている。しかしこの問題を除外したり、触れずにいることは、やはり宗教的な核心を無視することになろう。ここではきわめて論旨を単純な形に還元して取り上げてみたい。聖霊はあまねく

人間に宿ってはいるが、その働きは、聖母マリア、聖父ヨセフ、その他、キリストと同時代の使徒たちに現われ、やがて各地方各時代に目ざましい宗教活動をした人々が現われ、聖者として崇拜された。ここでは特に広く民衆的に崇ばれ親まれてきた守護聖者を取り上げてみることにしたい。庶民は守護聖者の中に聖靈の具体的な現われを見る。旧約聖書では人間は神の似姿に創られ、神の霊を宿すとのべている。しかし聖の霊を宿す存在としての人間への信仰は、まことに無規定である。聖者像の生成過程の中には一方において信仰のさまざまな諸形態が表現されるところと、他方ではこれを受け入れながら、自己の理想を希求する庶民の念願が表現されている。

(一) 聖クリストフォルス

中世後期の木版画に彫られた聖クリストフォルス (Christophorus, Christoph) の護符 (Zettel) は、民間に広く流布された単純な画像である。この画像にはつぎのような言葉が一しよに彫られている。

聖クリストフォルスを見つめる人は

その日いかなる悪い死にも出会わな⁽¹⁾い。

あるいはつぎのような言葉を彫っているものも可成り多い。

聖クリストフォルスを見つめる人は決して不意の災いに会うこと⁽²⁾はない。

「悪い死」(morte mala)、不意の災い (langore) いずれも共通するものである。不意の災いの最大なものは、突然襲う死であり、悪い死である。生あるものの死は避けたいが、キリスト教徒であるヨーロッパ人は懺悔告解ができず、秘蹟ミセキを受けられない状態を極度に嫌悪し、死にあたり心の準備を願ひ、頓死することを願わない。したがって突然の不幸の死を悪しき死と呼んでいる。聖クリストフォールの伝説によれば、サモス島で殉教の死を遂げるに際して「もしわたしを見つめる者、神に信頼を置く者であれば火、嵐、洪水、地震、飢餓の災いから救われよ」という誓いを立てたといわれる。ここから発展して、死の不安、さまざまの危険や災いを感じる時には、この聖者を思い浮かべると、すべてが消滅するという民間信仰が広まっていった。イエス・キリストの生涯についてマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ等々伝記の記録者がはっきりしているのに対し、中世の聖者の記録者はあまり明かでない。「黄金伝説」の (Legenda Aurea) ヤコブス・フォラギネは有名であるが、彼は伝説記録の集大成者である。この問題について今は触れない。聖者の伝説がいろいろな形をとり、変容しながら伝搬していった。聖クリストフォールは広く民衆の中で迎え入れられた聖なる伝承の一つである。

クリストフォールの図像は、教会の内部の壁面、外部の壁、城門、橋、等々人通りの多いところにてきる限り大きく、目立つように画かれている。それは懺悔もせず、秘蹟も授けられぬまま、突如として死に襲われた者を守る救難聖者として崇拜されたからである。ここで注目すべきことは、この聖者を「見つめること」である。「見つめること」、「見ること」が救いに預かることとなる。むろん見ることはたんなる視覚的な問題ではなく、クリストフォールを一瞬心の中に想い浮かべること、「念すること」に通するのである。民俗的に単純化されて、たとえどのような生活をしていようと、この聖者を見つめるならば、悪いことに出合わず悪い死に会わないことが強調されるのである。ここに掲げたブックスハイムの木版画は一四二三年頃の代表的なツェッテルである。(第一圖) 素衣ヌイをまとったクリス



第一圖

トフォルスは棕櫚の大木を杖として激流の河を渡ってゆく。背中には幼児キリストを背負っている。河岸には水車小屋があり、製粉を終えた男が袋をかついで、家に帰ってゆく。もう一人の男は驢馬に乗せていた袋をおろしてこれから麦を搗こうとしているが、長い旅のせいか疲れて一休みしている。これにたいし彼岸には僧庵にいる修道僧が目印となるように暗夜の河を渡るキリストフォルスにランプを掲げて見守っている。穴から兎が半身をのぞかせている。彼岸と此岸、聖俗を対照させていると解されよう。棕櫚に実がついているのは、聖者が杖にしたこの棕櫚が一夜にして芽を吹き花を咲かせ、実を結ぶであろうと幼児キリストから予言されたその成就を示している。すべてこのような図像は民衆にとって周知の聖者伝説であり、表現については多少ヴァリエーションはあるにせよ、聖キリストフォルス像の典型的な図像である。

幼児キリストを背負う聖キリストフォルス像は、キリスト教を背負うヨーロッパ人の信仰の象徴的表現となつていた。⁽⁴⁾ 聖母マリアが幼児イエスを膝に抱いている造型とならんで、聖キリストフォルスが幼児を肩に乗せて立っている像を祭壇彫刻、祭壇画などによく見かけることがある。彼はキリストの養父聖ヨセフの地位に匹敵する場に立っているともいえるし、またマリアが母性的愛の象徴であるとすれば、キリストフォルスは父性乃至は男性的な愛の象徴として尊ばれたともいえよう。

ミュンヘンから北東オーバーバイエルン地方のエーベルスベルク (Ebersberg) 村に聖キリストフ (St. Christoph) 教



第二図

会がある。その名の如くここは聖クリストフォルスの守護を仰ぎ、祭壇にこの聖者を祀っている。(第二図) 特筆すべきはここにはクリストフォルスの生涯を描いた沢山の画像を掲げており、聖者に奉納された奉納画 (Votivtafel) がある。さらに七月二十五日の聖者の祭の日には、乗物や家畜の潔めの儀式がおこなわれている。ここで画像に基いて伝承のこの聖者の生涯をたどってみることにする。クリストフォルスはカナン (パレスチナ) 出身の巨人で強い腕力、体力の持主であった。はじめ「レプロブス」(Reprobus)、呪われた者、罰をうけた者と呼ばれていたが、のちにキリスト教に帰依し、洗礼を受けてクリストフォルスとなったといわれている。レプロブスは自己の力に自信を持つとともに、力のある者に憧れ、はじめこの地上で力ある者としての栄華と権力の権化の大王に仕えた。しかしこの大王でさえおそれる存在を知る。それは闇の世界を支配する悪魔である。彼は大王の許を去り、旅に出、荒野で悪魔の一行と出会う。ここでしばらく悪魔に仕えるが、悪魔があるとき、十字架の立っているのを見て、おそれ、わざわざ遠廻りしてゆくことから、悪魔よりも力あるキリストがいることが分る。そこでレプロブスはどうしたら、キリストに出合えるのか、キリストに仕えることができるのかを

苦行している修道僧に教えを乞う。すると修道僧はいろいろな道を教えるが結局彼に適わしいのは、力持ちであるから、河の渡守りとなって人々を対岸に渡す仕事をやるがよいといわれ、多くの人々を肩に乗せたり、荷物を運んだりした。ある夜河岸でクリストフォルスと呼ぶ声がある。見ると、幼児が向う岸まで渡してほしいという。いとまたやすいことゝ子供を肩に乗せ中程までゆく

と流れは激しく、子供は大変重くなり、辛うじて岸に着いた。わたしは今迄多くの人を運んだが、この子供のよう
に重いものはじめてであると告げる。すると子供は、自分はキリストであること、その証拠にキリストフォルスが杖
にしたその棕櫚は一夜にして芽を吹き花を咲かせ、実を結ぶであろうと告げ、その通りになったので、キリストフォ
ルスはキリストに出合いを遂げたことをはじめ知った。キリストに帰依してのちは、彼は他の聖者と同じように福
音を説いて歩き、ついには異教の王によって捕えられ、炉の中で熱く灼いた兜を頭にかぶせられたり、さまざま拷
問を受けるが、神の恵みにより、傷ひとつ受けない。王は牢獄に閉じこめた聖者のもとへ、二人の娼婦をつかわし、
誘惑させようとしたが、逆に彼はこの二人を懺悔させ、入信させた。さまざまの拷問を受けたのち、キリストフォル
スは斬首され、殉教を遂げる。殉教を遂げるにあたり、さきの木版画でのべたような誓いを立てた。この誓いが危急
の死や災いに際して一般信仰者の代願者となる。ほとんどの宗教に神と人間の間に仲介者がいる、キリストもはじめ
治癒神的性格を持って現われる。⁽⁶⁾のちには十字架の死、血を流す贖いによってもろもろの罪をきよめる存在となり、
神の子となり、父と子一体の位格へと高まる。キリストが始めに行っていたことを、かわって、聖母マリア、守護聖
者たちが治癒神の役目を果し、キリストへの取りなし、代願の働きを示すようになる。キリストフォルスも苦難、災
害に出合う人間たちのためにその願いを満す力強い守護聖者となる。

さきに挙げたように無限に、力に憧れる存在は現世の最高の力の存在へと近付く。しかし最後には見えざる聖なる
ものこそ最高の力と働きがあることに気付かせられてゆく。この過程は宗教性の問題として人間の中で反覆繰返され
る出来事であり、原型 (Archetype) である。キリストフォルス伝説は民衆に、広く受け入れられ、親しみやすい内容
である。救難の守護聖者となりながらも、巨体の肩に幼児キリストを背負う凶像がもつともポピュラーな聖者像とな
り、地域や時代を問わず広く崇拜されるようになった。彼はキリストを「背負う者」(Offens)と呼ばれているように

ヨーロッパには元々それぞれ民族固有の古い宗教、習俗を持っているところへ新たにキリスト教が布教されることによつて、ヨーロッパキリスト教ともいふべき新たな宗教形態が誕生した。ヨーロッパ人はキリストを受け入れ、「背負うことによつて、宗教的心情、道徳、社会的規範、習俗はまさにキリスト教的な刻印を持つものを示すようになっていった。

(二) キリストフォオルスの先行形態

キリスト教がヨーロッパに伝搬して新しい展開を見せる以前、コンスタンティノープルを中心とする東方教会において聖キリストフォオルスの崇拜はどのようなものであつたか。イコンの中には、犬の頭をし、鎧を身に着けた戦士の姿で表しているものがある。幼児キリストを肩に乗せることもなく、棕櫚を杖ともしていかない。その代りに楯と槍をたずさえているイコンである。このキリストフォオルスは「犬頭の民」(Kynokephalen)の伝説に基くものである。神の罰をうけ犬に変えられた部族があつたと解釈されている。しかし信仰の告白をすることによつて戦士キリストフォオルスは、犬頭で象徴する獣性が変容して、たちまち立派な武人となる主題が画かれているのである。あるいは十字架を手にして神の言葉(天使の告知)に聴き入っている犬頭の聖者の姿もギリシヤ正教の図像の中にある。(第六図)ヨーロッパキリスト教から見ると、いかにも異様な形態である。エジプトにおいては動物神が崇拜されており、すぐに想い浮べられるのは、パピルスなどによく画れている犬の神アヌビス(Anubis)である。アヌビスは死者を地下の世界へ導く案内の神、墓所の守り神として崇拜されていた。エジプトの宗教がローマ帝国の中にはいり、次第にローマ化された造型は、まさにイコンに画かれているキリストフォオルス像の手本となつたと推定され得るものである。(第五図)クリ



第四図



第三図

ストフォオルスの原型はこのアヌビス像であると断言してもよい程である。しかしそれを証拠づける資料的なものは何一つない。ところがエジプトの宗教にはクリストフォオルスに近い宗教的表象を持っているものももう一つある。それはアヌビスがオシリス、イシスの子である太陽神ホルス(Horus)を背負ってナイル河を渡る説話である。七月下旬シリウス星が夜明けのナイル河に昇る太陽を先導するのを見て、エジプトの神官(天文学者)が一年間の太陽の軌道を知り、いわゆるシリウス暦、太陽暦を発見するに至ったことは、夙に知られていることである。シリウスの鋭い光芒を、犬や狼の眼にたとえ、犬の星と呼んでいる。神の子ホルスをアヌビスが背負って川を渡る表象が、どのようにして、いつ頃ヨーロッパのクリストフォオルスが幼児キリストを背負うことと関連していったかは、きわめて興味深い問題である。

犬頭のクリストフォオルスがなぜ東方教会で、表現されるようになったのであろうか。おそらくエジプトにおけるキリスト教の布教伝道にあたり、コプト派は積極的にエ

ジプトのアヌビス信仰に対抗して、キリスト教的タイプの信仰を示す犬頭の人間乃至は戦士像（のちには聖者）を造型したのではなからうかとわたしは推定している。コプトにおいてキリストの母マリアも強く聖化された。それはエジプトの大陽神ホルスを抱くイシス母神の信仰と対抗するために、否、これを自己の中に積極的に摂取することによってエジプトに教勢を拡大していったようであり、またエジプト人の宗教的傾向には根強い母神（女神）崇拜があり、これを無視してキリスト教は発展し得なかつた。むしろ聖マリアについての歴史的な展開の過程にはローマ帝国内のヘレニズムにおける母神（女神）との接触変容同化の問題もあるが、ここでは主題ではないので取り上げない。キリスト教の発展に伴い、最大の敵敵となつたのは、ミトラ教であるが、その敵対者である太陽神ミトラすらキリスト教は自己の中に取り込んでいることについては、すでに触れたごとくである。もう一つ加えるならばローマの軍人たちの熱狂的な信仰を得たミトラの武人的性格を、キリスト教は聖ゲオルクの守護聖者の中に取り込んでしまひ、それによって対抗し克服をはかるのである。このようにしてキリスト教は現に存在する他の宗教とその文化の内容を自己の中に取り入れ、同一のものであることを主張することによって、自己独特の解釈と意味付与を行おうとする宗教的情熱を持っている。すでに東方教会において四五〇年頃カルケドンのニコメディアでは司教ユウラリア (Eulalia) によってキリストフォルス教会の潔めの式典がおこなわれたというビテュニイエン (Bithynien) の碑文が残っており、六世紀の終り頃ガラテアのテオドルス スコテス (Theodorus Scoetes) の伝記の中で悪霊を追い出すためにキリストフォルスを女子修道院の守護聖者として祀るよう懇願している。また五九八年タオルミナの教区の修道院はパトロソとしてキリストフォルスを祀ろうとしたと伝える。六八七年、六八八年、ローマにおいては聖アナスタシア教会の墓碑銘の中にはこの聖者の名を刻んだといわれており、下って十二世紀にはいると、ローマの暦の中に、キリストフォルス崇拜が組み込まれ、祭の日も定まったようである。現在は聖ヤコブの祭の日の七月二十五日か、その前日に行われて

いる。

巨人伝承と表象

クリストフォルスという聖者像は、さまざまな風貌を持って歴史の中に展開する。エジプト・コプトのアヌビス型は東方教会ギリシア・ロシア正教会全般に広まっていたが、ローマのカトリックにおいては一部分ではアヌビス型が受け入れられたもののその後全く異った発想と発展を遂げていった。図像と宗教的意味内容は不即不離のものである。新しい図像から新しい解釈が生れ、新しい解釈から芸術的表現の新しい発想が湧き出て、たえず一つの連鎖的な過程をたどることが多い。その反対に宗教的な要因が新しい図像を造り出してゆく場合は当然ある。双方はつねに刺戟し合う関係にある。さきにあげたフォラギネの「黄金伝説」(Legenda Aurea)では、クリストフォルスは巨人であったと語っている。ここではアヌビス型伝説は消え、カナン出の人間であるとその出自の場所まで明らかにしている。カナンの出であることは、この聖者が旧約新約聖書を舞台にしており、しかも巨人であるとすれば、旧約聖書のサムソン伝説につながり、ヘレニズムの側からいえば、ヘラクレスのような力を持つ英雄、オリオンのような巨人などを背景にしていると考えられる。

ところでローマからミラノへ向い、アルプスの山々を越えて中部ヨーロッパへキリスト教が伝道されるにつれ、いよいよ巨人像の明確な特色を示すに至った。文物を運ぶ担い手とは、山で働く荷役の人々、旅行者、商人、そして宗教的布教伝道の聖職者たちである。スイス山中の村落にはじつに聖クリストフォルスの像が多い。しかも力強く逞しい巨人が幼児キリストを背負っている姿である。ここでは河を渡る主題よりもがっちり道を歩く歩き方にアクセントがある。ここに掲げた図はチロール地方のプスタタールの教会のクリストフォルス像である。(第三図)スイス、ドイツ、オーストリアの山地にある都市や村落には濃い髯を生やし、右手に棍棒(又は樹の幹)を持ち乱れた頭髮、乃



第六図



第五図



第八図



第七図

至は髪を長く垂らし、毛皮を身にまとい体格の大きい男性像を造型しているのをよく見かける。いうまでもなくヨーロッパの山岳地帯、森林に出没していた「野性人」(Wild Man)である。今日のスイス人はこのヴィルデマンの子孫であることを誇りにしている。スイスの伝説の中には、山にはいつてこの「野性人」、あるいは、「山男(山の精霊)」(Bergmann)に出合った話が各地に残っている。スイスのシュヴァイツ出身の司祭、トーマス、インモース(Thomas Immoos)氏は野性人はスイスの自然そのものであるとはっきり断言しておられる。自然を人間化すれば山の精霊となる。ときに怪異な存在であったり強い力の持主であったり、人間を助けもするが、一旦怒らせるとおそろしい力を發揮する不気味な存在でもある。普通の人々は滅多に出合わないが、手指、足指は鉤爪かぎづめのようになって早く走るといい、四つの手を用いるということから、猿と人間の混合した空想的なものとして表象する場合もあったらしい。山岳が取り巻く大自然にあつては畏敬感をもつて接すべき精霊が生きている。中高ドイツ語のウィルト(Wild)は、ほしいままにふるまうとか、衝動的な自然性、力強さ荒々しさを意味する。スイス(ヨーロッパ)人は、おそらくクリストフォルスを自分達の生活の根にある野性人の表象で受け入れたと思われる。さきに述べたチロールのクリストフォルス像は、キリスト教の何であるかを理解することによって生れたのではなく、自分達がつね日頃抱いている野性人に似ている。あるいはわれらの山男(山霊)と類似の存在であるという親近感からクリストフォルスを受け入れていったのであろう。かく受け入れることによって逆にクリストフォルス像もスイスの野性人・山男に近いものへと変容していったのではあるまいか。聖クリストフォルスの研究者ローゼンフェルト(Rosenfeld)は実証的に調査した結果、ミラノ地方の文化的影響下にある南アルプス地方において、クリストフォルスの新しい図像の表現が生れたのであろうと推定している。この推定は妥当性が多い。ただ南アルプスと限定せずとも、広くスイス全体が新しいヨーロッパのクリストフォルス像の揺籃の地であつたと考えてよいのではあるまいか。兎に角四千メートル、三千メー

トルの山岳を越え重い荷駄を負って南北の交流、流通に務めた山の労働にたづさわった人々の守護聖者となったとき、聖クリストフォルス像は、山男の姿に限りなく近付いていったのである。同時にこの聖者はヨーロッパからローマへローマから北のヨーロッパへと巡礼する巡礼者たちの守護聖者ともなっていたことも当然の成り行きである。

二月頃に各地の町や村でおこなわれる冬送り夏迎えのファスナット (Fasnai, Fasnacht) の行事には、毛皮をかむるか毛むくじやらの扮装をして棒を持つ野性人^{ワイルドマン}が踊る。この野性人は女の野性人、ヴィルデフラウ (Wilde Frau) とペアになって踊る。夏の自然の精霊を呼び醒すために、人間の自然の元の姿ともいべき野性人に戻って奇声をあげ、狂喜乱舞し歌う。このような野性人はのちには文明化された人間の社会から逸脱した存在として理想化される。そして極限において聖者像へ近付いてゆく。聖者たちは荒野や森へ赴いて祈り瞑想し、神の声を聴く。その典型の一つは聖マグダレーナ像である。聖書のマグダラのマリア像は苦行者のエジプトのマリアと同一視され、伝承の上では荒野で苦行したといわれる。この場合、毛皮で身をおおい、手を合せ、神の声を聴こうとする。これを天使たちが支え扶けて天上へと引き上げてゆく。その時の姿はまさにこのウィルデマンやウィルデフラウと同じである。しかし精神内容は全くちがってあくまで、聖なる崇高なるものへ向う苦行の聖者となっている。ここに掲げた彫刻は中世後期のヴェルツブルク市で生涯を終えたティルマン・リーメンシュナイダーの「聖マグダレーナ像」である。(第七図) この像ははじめミュンナーシュタット市のこの聖女の祭壇のために造られたものである。しかしこの造型が完成した頃には、聖女がまどっているのは毛皮ではなく、裸身の姿をあわれんで全身を髪毛でおおうたとか、はじめ動物のごとく毛でおおわれていたが、信仰が深まるにつれて人間らしい顔や手足が見えてきたという解釈や伝説も生れてきたようである。⁽⁸⁾ このような女性像に比肩し得る男性像は聖クリストフォルスであろう。犬で表現されたあの獣性から脱却、変身 (Metamorphosis) して戦士へととなってゆくエジプト・ユプトの宗教的心意はかすかながらヨーロッパにおいても残っ

ている。巨人クリストフォルスは、巨人的表象以外に野性的表象が加わってゆく。このことは先行のゲルマン宗教との関係も無視できない。雷神ドナール(Donar)も巨人として表象され、赤い髪をし、強い腕や足で人間や神々を楽と運ぶ力を持っている神である。ヴォーダン(Wodan、北欧のオーディンと同じ主神)とならんでドナールは農耕、狩猟の神として崇拝されてきたが、この神の祭儀からクリスト教の守護聖者の祭へ移行はきわめて自然に行われたらしい。力を求め、生命力溢れるものを喜び、力に最高の価値を置くゲルマン・ヨーロッパのな心情においては、聖クリストフォルスは熱烈に喜び迎えられたようである。長い間に修道会の修道士の間で瞑想され、又山で働く庶民の中で願われたものの中から、ヨーロッパ人に適わしいクリストフォルス像がじょじょに形成され最終的には幼児キリストを背負い、危急の死の誓いを立てた聖者像に定着していった。フライブルク市のミュンスターのステンドグラスはやさしく思慮深い聖者像となっている。(第四図)ギリシア・ローマ(ゲルマン)では、神々や精霊の変身が語られるのにたいし、クリスト教においてはつねに信仰帰依が存在を変えろという思考が貫いているとわたしは考えている。伝説としては単調であるが、精神の強靱さがある。

(三) クリストフォルスの銘文と図像の意義

獣性の犬で表象する「呪われた者」が信仰を持つことによって、真の人間となってゆくという東方教会の聖クリストフォルス像は、エジプトのアヌビス的存在にたいし新しい解釈を加えることによって、別な展開をなすに至ったものである。さらにヨーロッパでの幼児キリストを背負うクリストフォルス像は、次元的にもさらに新しい飛躍的な発展を遂げたものと見る事ができる。

フォラギネの「黄金伝説」の中ではこの聖者の殉教の苦難のわずかずを叙述してはいるが、救難聖者として死に臨んで誓った言葉については、全く沈黙している。クリストフォルスに、早くから守護の働き、悩める人間を救う要素のあったことは疑うべきではないにしても、救難にともなう諸種の誓いや祈りが宗教的思惟の中にはっきりしてくるのは、中世半ば過ぎと見てよいのではないか。

とくに十四人の救難聖者が選ばれるようになったことは、当時の宗教の状況の一端をうかがわしめる。宗教は次第に庶民の間に滲透しつつあり、王侯、貴族、司教、領主のものだけでなくつつあった。畑を耕し、森林を伐採し、山で働き、荷物を運び、漁撈をいとなむ人々にとっては、祈りを捧げ、讚美歌を歌うゆとりは乏しい。また今までに述べたようなさまざまな危険は庶民の生活では絶えず直面せざるを得なかった。キリスト神に代願する守護聖者が一般の人々に必要であった。かつては讚美歌を司祭、助祭、神父などが歌い、庶民はこれに合せて手拍子を打つ程度であったことが、村の古い記録に残っている。現代の文化の状態で推測するのは禁物である。やがて救難聖者が殉教するに当って、悪魔（悪霊、病魔を含む）、雹、悪い天候、落雷、嵐、早魃から人間を守るようにと誓いを立てたという伝説 (Legend) は、広く深く受け入れられた。救難聖者は各々その役割に応じて誓いを示した。うら若くして殉教を遂げた聖バルバラは、斬首の刑を受けるにあたり、死に臨む人々に安らかな想い、恵みを与えてくれるようにと祈ったという。したがってこの聖女は臨終の守護をするのみならず、さらに鉱山で働く人々の守護聖者として崇拜された。騎士（軍人）の守護を司る聖ゲオルク、火災から人々を防ぐ聖フロリアン等々聖者はかならず守護すべき契機となる伝説と代願の誓いを持っている。聖クリストフォルスの守護を仰ぐ職業はじつに多い。船員、荷物運搬人、筏師、巡礼者、旅行者、現代では交通事業にたづさわる人々、棕櫚の杖を持ち、一時に花を咲かせ実を結ばせたという奇蹟により、庭師、果樹栽培に従事する者、農民、果樹取引きの商人、幼児キリストを背負ったという伝説により、

子供及び妊婦の守護聖者ともなっている。その他力仕事に従事する建築、石工、土木関係、さらに製本、帽子製造業、物業のツンフトまで加わっている。また橋にこの聖者像が多いのは、橋は元来人馬を渡す目的があるとともに、この橋の安全堅固を聖者に祈る意味がある。城（要塞）などの壁画にも大きく画れている場合も多く、個人的な住宅にもあることはいうまでもない。本論に戻すとこの聖クリストフォルスはヨーロッパにおいて中世後期から近世にかけての大きな変動に際し民俗的な聖者となり、時と処を選ばず、日常の仕事に従事する人々に身近かに救いの手をさしよべる存在となっていた。その重要なモメントはこの聖者を朝「見つめること」によって、夕方まで生命を無事保つことができる存在といわれるようになった。さらに突然の死や災いから守る聖者として巨大なクリストフォルスの画像がつけられ、いつでもどこでも見ることができるようになっているのは、多くの庶民の切実な宗教的な願いに応じて配慮していったからである。

クリストフォルスの姿（画像）を見つめるならば、たとえ一瞬であろうとも、恩寵に出会うというテーマは、信仰の焦点として全キリスト教の世界観、存在観を凝縮するものであるともいえる。

聖クリストフォルスを毎日見つめる者は

その日いかなる悪いことに出会わない。⁽⁹⁾

画かれた聖クリストフォルスを見つめる者は

その日悪い死にあうことはない。⁽¹⁰⁾

このような語句は、時代や地域によって多少異なる表現をしているが、聖なる画像を「見つめる」行為の意味をつとめて強調しているという点ではすべて共通している。キリスト教においても神やキリスト、聖母マリアにたいして長い祈りの言葉があり、後世になるにしたがって壮重になり、二重、三重に祈りの言葉が繰返され、典礼としての重みを持つものとなつていった。また修道院などでは、長い瞑想、観想に修道士たちは没入した。このことは他の諸宗教にも見られる共通の現象である。しかし他方では、祈りは短かくなり、「神の子キリストわれを憐み給え!」「主よ憐み給え!」とか、「アヴェ マリア!」とかが唱えられるようになる。農耕牧畜、手仕事などに従事している庶民にとっては長い祈りよりも、短い「切実な祈り」(切實な祈り)が現実に適わしい。一日の厳しい山仕事、手仕事の人、あるいは荷物を運搬する人夫たちにとって、危険を避けるための短かい祈りとともに、聖キリストフォルスの圖像を見つめることによって守護と恵みを得ようとする単純な行為に自己の信仰の道を托す。

偉大なるキリストフよ

あらゆる危険よりわれらを救い給え。⁽¹¹⁾

この祈りはフランケン地方の十四救難聖者の巡礼に際して唱えるものの一つである。つぎの代願取りなしの祈りも今迄のべてきたものの単純化された表現である。

あなたの殉教のほまれにより

神にたいするあなたの代願はどこにあつても助けとなりませぬ。⁽¹²⁾

遠く旅に出掛け、巡礼に赴くときにもつぎのような短い祈りが行われる、

クリストフを見つめ、

信頼して道をゆけ。⁽¹³⁾

このような聖者の図像を見つめての祈りは、同時に内面において心を集中し聖者を想ひ、祈ることもある。聖者を見つめること、凝視は凝念につながり、黙想にはいる。いわゆる *Andacht-Bild* は黙想のための像を意味し、教会、祭壇に安置されている聖者像はたんに観るため、飾るためのものではなくて、祈りや瞑想にはいるためのものがある。

おムキリストを証したクリストフォルスよ、

あなたによって吉き兆しが与えられ、

多くの病氣、迫る饑餓、悪しき病いを追い出し給え⁽¹⁴⁾

これはウォルムスのドームに誌されたものである。祈願の内容はさまざまであり、果樹栽培園主や農家では「われらに季節に食べる大きな林檎、杏を与えたまえ」、というような祈りもある。また幼児キリストを肩にして流れを渡る黙想画 (*Andacht-bild*) につきものような銘文が誌されているものがある。

聖なる御方の重味が

わたしの肩を押さえつけることはない

おゝ軽やかに喜ばしくわたしは彼を運ぶ

わたし自身もまたこの方に運ばれながら。⁽¹⁶⁾

このように思索、瞑想の中から生れたようなものもある。さきに挙げたミュンヘン北郊オーバーバイエルンのエーペルスベルクの聖クリストフ教会には、この聖者に献げた奉納画 (Ouvrage) がかかげられている、二頭の馬に鋤を挽かせている間にころび、危うく助かった感謝の画で、右手に幼児を肩にしたクリストフォルスを描いている。あるいは子供と母親の健康、生長を祈る農民の奉納画などもあり、出産、病氣その他事あるごとに現在も奉納画を村人が持って奉納していると司祭アルヌルフ (H. Arnulf) 氏は語っていた。ここでは現代になってあらたに起った交通守護の聖者としての聖クリストフォルスの祝福が毎年七月二十五日にさかんにおこなわれる。この日には遠近の町や村から自動車トラック、トラクター、馬、牛、羊などが沢山教会のもとに集ってきて、聖者の祝福を受けるのである。

鉱山の救難聖者バルバラ

人間にとって万が一の危急の災害はもつとも痛切な出来事として感じているため守護聖者はとくにこの救難聖者に関心が集っている。前に少しくふれた聖女バルバラは庶民の生活の中では、とくに鉱山で働く人々から篤い守護を仰ぐようになった。この聖女はクリスマスを迎えるためのアドヴェント期に、春にさきがけてゲルマンの女神や精霊に

代るキリスト教の女性的聖性を示す存在として祝われている。十二月四日はこの聖女の祭の日である。「バルバラの枝」(Barbara Zweige)といつて桜桃、杏、れんぎょうの枝を切つて壺に挿し、クリスマスの日に咲く花を見て豊凶を占つたり願をかけたりの習俗がある。だが鉱山ではこの日熱狂的なバルバラの祭がおこなわれる。その時坑夫たちのさまざまの歌が歌われるが、ここではとくに聖女にたいする祈りの歌をとり上げてみたい。

おゝ聖バルバラよ！ 聖バルバラよ！

危険にあるすべての坑夫の守護の聖女よ、

われらを守り給え

聖バルバラよ ガスの爆発から、われらを守り、

われらの救い手となつて下さい

火がおそうとき、われらを守つて下さい、

岩が裂けるとき、われらを支えて下さい、

大地がわれらをかこむとき、かばつて下さい、

水が溢れ出るとき、われらをおおつて下さい、

道に迷うとき、われらを導いて下さい、

最後の戦いにおいてわれらの側に立つて下さい、

われらをお守り下さい、聖バルバラよ！⁽¹⁶⁾

これは広く各地の鉱山で歌われている簡略化された「鉱夫の祈り」(Knappengebet)である。つぎはオーバーシレジ
ア地方の鉱山で歌われている民謡である。

聖バルバラよ、気高き花嫁 聖バルバラよ！

聖バルバラよ、わたしは身も心も貴女に信頼を寄せています。

生におけると同じように死においても

最後の苦難にわたしを助けて下さい！

わたしの終りにあたり、聖なる秘蹟を受けられるよう助けて下さい、

神の恩寵の中でわたしが死ぬるよう

神のもとで多くを受けつぐことができますように

悪い敵をわたしから追い出し、

貴女の助けがたえずわたしにとどまりますように

魂が肉体を離れるとき、

貴女の御手がこれを受けとって下さるように、

地獄の苦しみから心を守り

(17)
天国へ魂を導いて下さい！

深い坑道を通じて地下で働く人々は、たえずせまる危険を感じつつ、バルバラに祈る。守護聖者は他にもおり、クリストフォルスその他も当然いるのであるが、鉱山では何故かこの聖女の崇拜が熱烈である。クリストフォルスが苦悩を背負い、力強い男性的な宗教意識を示しているとすれば、バルバラはマリアやアンナとともに、やさしいいたりや愛情を象徴する女性的な宗教心理を象徴しているのであろう。地下の坑区にあっても、なお最後の秘蹟は絶対に必要であると確信するのが、クリスト教である。聖バルバラは聖母マリアを讃えるのと同じような「清き処女」、「花嫁」、「われらの女王」とも呼ばれている。鉱夫の子供の祈りの歌に、「聖バルバラ様、毎夜坑内にいる父と一緒にいてあげて下さい！災いときには父のそばにいて下さい。突然の死から父を守って下さい！」と祈る歌もある。子供でも「突然の死」(Jahen Tod) から守ってほしいと祈っている。聖バルバラは画像学では右手にホスティエ (Hostie) を入れた杯を持っている。(あるいは殉教の印である棕櫚の枝や塔を捧げている場合もある)。ミュンヘンの国立美術館にはリーメンシュナイダーの聖バルバラ像の作品がある。ホスティエの杯を手にささげ、遠くを見つめている顔立ちには清らかさと敬虔な想いがこもっており、まさに鉱山その他で真剣に働く人々の心情に相通するものがある。宗教においては特定の芸術家の強い表現力によって突如高い芸術的境地に到達し、それが新たに宗教的情念を覚醒させることがある。しかし信仰にあっては画像はかならずしも芸術的に優れていることを必要としない。画像が表わしてい

る宗教的意味や象徴がまず前提条件であり、自己の内面に宿し、これを想い浮べることにある。芸術的に優れていないから拝まないという態度はあり得ない。ところが現代の美術史的な立場での「観照」は今迄述べたような聖クリストフォルスを見つめるのとは全く異った態度で圖像に接している。祈りと瞑想の中に生きる圖像は、芸術を創み出す源泉であり、母胎であるが、一旦そこを出てしまった美術は、純粹に自己の存在を主張し、自立したと思つた刹那、分裂対立し、自己をさいなみ人間や文化を嘲弄するシニツクなものとなってゆく場合が多い。文化の歴史の潮流の中にあつて宗教自身さえも歴史性を重んずる実証的態度を現代はずつと求めてきた。聖書そのものにも厳しく求めていゝるし、中世を豊かに彩つていた守護聖者にたいしても当然あてはまる。ただ聖者の墳墓があり、レリキユが遺つていゝることが歴史的に実証されておれば、正しいという安易さで終つてしまう場合が多い。ある生起した宗教現象の背景に社会的な一、二の要因を見出すだけで納得してしまふ傾向もなくはない。かつての聖者の「伝説」(Legenda)を創み出した情熱は、本来何であつたかを改めて考察する必要がある。文化の各分野が自己の存在を主張することによつて現代は分解し、芸術も貧弱になつた。宗教が聖者の伝説の文学性、情念性を排除したとき、瘦せ細つていった。宗教の持つ本来の力は、実存や文化にたいするその綜合力であつたはずである。

註

- (1) Christophori faciem die quacunq̄ue tueris, Illa nempe die morte mala non monietis.
- (2) Christophori sancti speciem quicunq̄ue tuerit, Illo nempe die nullo languore tenetur.
- (3) この木版画はボーデン湖のブックスハイム (Buxheim) 修道院からのもの。一四二三年製作。年代としても古い。
- (4) ロマン・ロランの長篇小説「ジャン・クリストフ」の初版(一九〇四年二月九—二十一年十月)の各冊には、さきあげた銘文と同じように、「いかなる日もクリストフの顔を眺めよ、その日汝は悪しき死を死せざるべし」を扉に載せていた。この銘は、著者のひそかな希願を表現したもので、ジャン・クリストフが著者にとつてと同様に読者にとつても、苦難を通

じてのよき伴侶であり案内人であらんことを、祈ったものである。「豊島与志雄訳「改訳について」〔序言〕岩波文庫。このようにロランは自己の理想的人間像をえがくにあたり、この聖者を元型としている。

(5) この写真は聖クリストフ教会の中央祭壇の像である。一六〇〇年代の古い像は教会の左手に安置されている。周囲の装飾はクリスマスのため、普段ははずされている。

(6) 「治癒神イヘノの誕生」(山形孝夫著 小学館)

(7) 「ヨーロッパの祭の伝承」(植田重雄著 早大出版部)

(8) 「神祕の芸術リーマン・シマイターの世界」(植田重雄著 新潮社)

(9) Wer St. Christerrum alle tag früt ansicht... Der fer dtt desselben tags in Rainen siechtagen nicht. Handschrift des

Karlsruhes Landes-bibliothek, St. Georg LXX, 15 Ih,

(10) Welcher mensch ansiecht sand Cristof gemalten, Der ist des tags vor ain pösen tod behalten. Handschrift der Stiftsbibliothek von St. Florian XI 350, 15 Ih. (9) (10) (11) (12) と全く同じ内容であるが、前掲の語句はラテン語「これは中世キリスト語である。どこのものがいである。当時の一般庶民にとってラテン語の方が有難く感じた。しかし十五世紀になると中世語で表現するようになっていくことを示す。

(11) großer Christoph uns errete

Aus aller Gefährlichkeit.

(12) Dein pitt gen gott hilf hier und dortt vmb deiner martrer ere. 1511四年 ヴァレンティン・ヤンセン(Valentin

Holl) のこの副神の題意の一語である。

(13) Schau den Christophorus an und dann geh sicher des Weges (Mira a San Crisóbal, Y marcha despues seguro.)

(14) Per te strenu datur, morbi genus omne fugatur. Atra fames, pestis, Christi Christophore testis. 1511年 ヴァレンティン・ヤンセンの題意。

(15) Die Schultes drückt mir nicht,

Der Bürde heiliges gewicht.

O leicht u: freudig trag' ich ihn,

Von dem ich selbst getragen bin.

(9) Schütze uns, schütz uns, schütze uns, St. Barbara!

sei unse Erreter

Bei schlagend Wetter.

Wollst uns behüten,

Wenn Flammen wüten,

Wollst uns erhalten,

Wenn Felsen spalten,

Wollst uns erretten,

Will Erd uns betten

Wollest uns schirmen,

Wenn Fluten stürmen,

Wollest uns führen,

Wenn wir verirren,

Im letzten Streite

Steh uns zur Seite.

Schütze uns, schütze uns, St. Barbara!

ヨリキキヤンキヤン (August Kemmermann) ヲノノ原カノ折リ (Knappengebel) の形を藉りた鉾山の歌である。

(17)

Sankt Barbara, du edle Braut, St. Barbara,

Mein Leib und Seel sei dir vertraut, St. Barbara,

Sowohl im Leben als im Tod,

Komm mir zu Hilfe in letzter Not

Hilf, darz ich vor meinem End.

Empfang das heilige Sakrament!

Bei Gott mir nur so viel erwerb,

Daß ich in seiner gnad absterb.
Den bösen Feind weit von mir treib,
Mit deiner Hilfs tets bei mir bleib.
Wenn sich die Seel vom Leibe trennt,
So nimm sie auf in deine Hand.
Behüt sie vor der Höllepein,
Und führ sie in den Himmel ein!

參事文鑑

- H. F. Rosenfeld: Der Hl. Christophorus. Seine Verehrung und Seine Legende. 1937.
B, Hahn-Waernle: Christophorus in der Schweiz Basel. 1972.
G. Benker: Christophorus, Patron der Schiffer, Fuhrleute un Kraftfahrer, München, 1975.
Jacobus de Voragine, Legenda. aurea übers. von R. Benz Heidelberg 1965 (5. Aufl), H. Appuhn:
Einführung in die Ikonographie des mittel-äterlichen Kunst in Deutschland. F. W. Mielck:
Christophorus, L. Kùppers: Barbara Heilige in Bild u. Legende 1968, Bongers Recklinghausen.